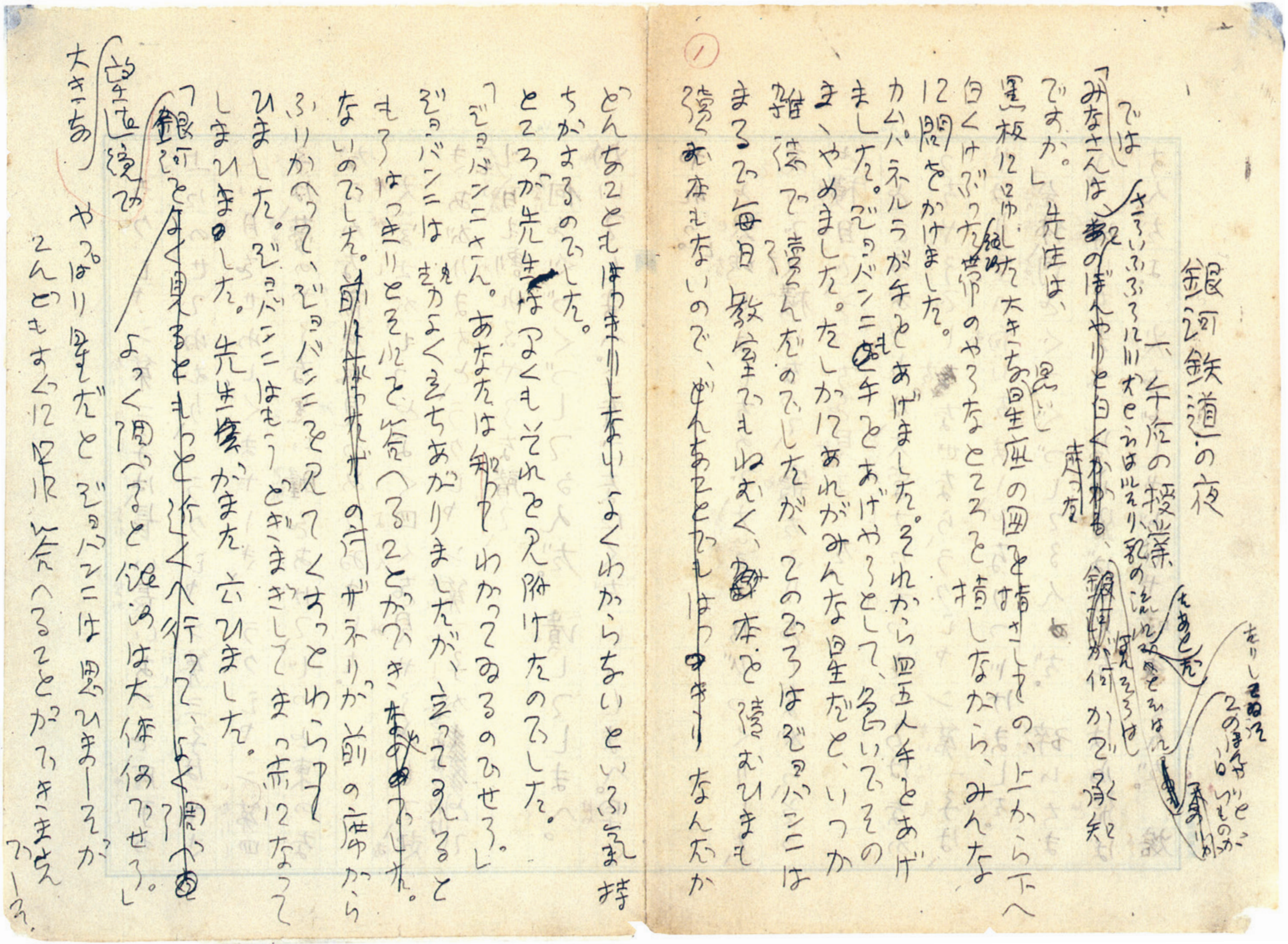


銀河鉄道の夜

一、午後の授業

「みなさんは、あのぼんやりと白くかすむ
ですか。」先生は、黒い
黒板にはじめて大きな白い
白くけぶった帯のやうなところを
12問をかけました。
カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。
ましたが。ゴーシュも手をあげやうとして、名いてその
まゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか
雑誌で読んだのでしたが、このごろはゴーシュは
まるで毎日教室でも眠むく、本を読むひまも
ないので、ぜんぜんあとでしらべようとおもひながら なんだか

どんなことも はつきりしてゐないといふ気持
ちがするのでした。
ところが先生はつよくもそれを見附けたのでした。
「ゴーシュさん。あなたは知つてゐるのですね。」
ゴーシュはさかんにあがりましたが、立つてゐると
もうはつきりとそれを答へることができなかつました。
ないのでした。前の席の方がザネリが前の席から
ふりかへつて、ゴーシュをみてくすくすわらつて
ひました。ゴーシュはもうどぎまぎしてまつ赤になつて
しまひました。先生がまた云ひました。
「銀河をよく見ようとして行つて、よく問へ。」
よく問へると位置は大体位置はつきりせる。」
大きな望遠鏡で
やつぱりまだとゴーシュは思ひました。
そんどもすぐには答へることができませんでした。

宮澤賢治 生誕120周年記念連載

銀河鉄道の夜空へ 七

Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

ふたご区 オリオン区 うさぎ区 いっかくじゅう区

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会　写真：飯島 裕／山根 悟／石川勝也　協力：宮沢賢治記念館

★これまでの連載記事は（壱）2016年12月号、（弐）2017年08月号、（参）2017年12月号、（四）2018年12月号、（五）2020年08月号、（六）2022年春号、でお読みいただけます。webで「国立天文台ニュース」のバックナンバーをご覧ください。

★本記事は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房刊）を基礎資料・出典として作られています。

ふたご区

かに星雲の花火は、静かにフェードアウトしながら、やがて視界からも消えていった。次はなんだろう。なかばわくわくしていると、子どもたちの一人が進行方向の右側の窓の外を指さして叫んだ。

「あれきっと双子のお星さまのお宮だよ」

右手には低い丘があって、その上に確かにふたつ同じ大きさのお宮が並んでいた。これはふたご座なのか。ふたご座は天の川の東側にある。オリジナルでは、小さな水晶でできているようなお宮のはずだが、確かにきらきらと光っていた。ここで問いかけをしなくてはならないはずだ。なんだか私は何かに迫られるように聞いてみた。

「双子のお星さまのお宮って何か知っているの？」

すると今度はお姉さんの方が答えた。

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮でふたつ並んでいるからきっとそうだわ」

弟も続けた。

「ぼく知ってるよ。双子のお星さまが野原へ遊びにでて、からすと喧嘩したんだろう」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おかあさんがお話したわ……」

「それから彗星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ」

「いやだわ、いっちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方の話だわ」

うーむ、とうなってしまった。ほぼオリジナル通りではないか。聞きながら、本当に不思議だと思った。彗星の研究者としては、ここで彗星に実際に登場してほしいものだと思いながら、窓外にその姿を探してみたが、それらしきものは見つからない。目をこらしても、ほのかに光る川と、地平線まで続くように、三角標らしきものがずっと並んでいるだけだった。彗星は、オリジナルでも登場していないので、致し方ないのだろう。

ところで、天の川の華々しさが、やや失せてきている気がした。それはそうだ、と思い直した。冬の天の川は夏に比べれば極めてほのかだ。これも忠実な天象の再現だとすれば当然なのだろう。

「おじいちゃんの家の近くにも、星の宮があるよ」

子どもたちの会話が、オリジナルと少しずれてきた。笛の話があったはずだが……それにしても、この子たちは何処の子たちだろうか。星の宮は妙見信仰に由来していて、各地に存在する。そこで、私は思い出した。福島県いわき市の龍灯伝説があるあたり、勿来という地域にも星の宮神社があったはずだ。かつて私はいわきに住んでいたことがあり、その神社の名前を覚えていた。もしかするといわきの子どもたちなのだろうか？　ただ、妙見信仰は全国的なので、星の宮というのが、どこにあってもおかしくはない。岩手県宮古市や釜石市にも同様な神社があると聞いたことがある。三鷹に近い場所では、埼玉県の所沢市にも星の宮という地名があったはずだ。どっから来たの、と聞こうとしたが、思いとどまった。これから彼ら彼女らが向かう先を考えれば、住んでいた場所をあえて聞いて、どうするのだという気がしたからだ。

オリオン区

そうこうしているうちに、双子のお宮は後方へ見えなくなっていった。と、列車の左側がにわかに赤くなってきた。その赤さは近づくにつれてどんどん強くなり、そして天の川の川面にも、赤い光をちらちらと投げかけ始めた。光のもとをたどってみると、そこには野原のような場所で大きく、まっ赤な火が燃えさかり、黒いけむりが高くたちのぼっていた。まさに桔梗色のつめたそうな天をも焦がしそうな勢いだ。子どもたちに目を向けると、やはり迫り来る赤い光に目を奪われていた。

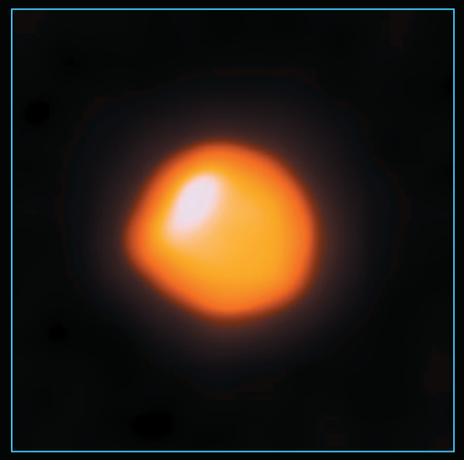
そうだ、オリジナルではジョバンニがカンパネルラに問いかけるシーンである。しかし、カンパネルラはいないし、私はジョバンニでもない。どうすればよいか、考えあぐねていると、先ほどの海上保安庁の職員が独り言のように問いかけてきた。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるのだろう」

いささか役割が違うのではないか、と思いながら、私は天文学者として答えるべきかどうか迷っていた。明らかに、夏の星座であるさそり座ではないからだ。この場所、その赤さから見ても、ほぼ間違いない。これはオリオン座の一等星ベテルギウスだ。

ふたご座から3つの1等星（オリオン座のベテルギウス、おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン）が形作る「冬の大三角」の中へと淡く流れ下る天の川（銀河）。（『国立天文台ニュース』2022年春号のp26「ダイヤグラムVol.02」も参照／撮影：飯島 裕）

ふたご座、オリオン座、うさぎ座の星座絵図（バルディ星座絵図・17世紀後半）。「いっかくじゅう座」は描かれず、古来より伝わる伝統的な星座のみが紹介されている。（星座絵図画像：千葉市立郷土博物館）



オリオン座に赤く輝く1等星ベテルギウスを、アルマ望遠鏡が視力4000を超える超高解像度で捉えた画像。ベテルギウスは、太陽のおよそ1400倍の大きさにまでふくらんだ赤色超巨星で、その寿命はあとわずか。表面が少し変形している様子もわかる。

うさぎ座にある脈動変光星（うさぎ座R星）。とても赤い色をしていることから「クリムゾン（深紅色）スター」の名がついている。およそ430日の周期で5.5等から11.7等の変光を繰り返す。大気の炭素濃度が高いために、赤い波長成分が卓越し深紅色に輝いている。（撮影：石川勝也）

赤色超巨星という意味では、オリジナルのさそり座の一等星アンタレスと同じだ。ベテルギウスは、この列車でもアンタレスの役割もするのだろうか。そう思いながら、私はきわめて冷静を装って答えた。

「あれは、ベテルギウスというオリオン座の一等星ですよ」

それまで黙って赤い光を見つめていた子どもたちの反応は意外だった。

「あら、ベテルギウスのことなら、あたし知ってるわ」

「ベテルギウスって、なんだい」

今度は海上保安庁の職員が聞いた。ここでも役割がすり替わっている。なんとも不思議な感覚で、私は黙って聞いていた。

「超新星爆発するかもしれない、と期待されているとっても大きな星よ。その星がいまでもあるかどうかわからない、もう爆発しているかもって、あたし何べんもお父さんから聴いたわ」

「もう爆発している？」

「ええ、ベテルギウスまで距離が遠いから、その光が届くのは何百年もかかるの。だから、いま星として輝いているかどうかわからないっていうの」

感心した。なんて正確な理解なのだろう。もしかしてこの子は理科少女なのか。その子とともに、その話の展開がどうなるのかに俄然、興味を持った。

「そうか、何百光年という距離のことだね」

さすがに海上保安庁の職員だけある。その種の知識もあるし、理解も早い。

「そうよ。でも、いま見る限りでは、まだ爆発はしていないようね」

あぁ、そうか。時空を超えた銀河鉄道から見れば、現在が見えるのだろう。まだ爆発していないということがわかるわけか。私はどこかで妙に納得してしまった。もともと、不思議なことばかりなので、多少のことではすでに驚かなくなっている自分がいた。

うさぎ区

「あ、ウサギがいるわ」

そうだ。ベテルギウスが見えるということはオリオン座である。その足下にはうさぎ座があるはずだ。よく見ると、天の川のほとりを目の赤いウサギが列車を追うように走ってくるではないか。その目の光は、ベテルギウスの火よりも赤かった。そうだ、クリムゾン・スターだ。ケフェウス座のガーネット・スターと並んで、赤さを競う星である。やはり、現実の星座や天体をなぞっている。そう思わざるをえなかった。

「あのウサギ、とってもかわいいね」

いっちゃんと呼ばれている弟が言った。

「そうよ。かわいい、そしてりっぱなウサギだわ、お父さんに聴いたの。むかし遠い天竺の野原に一匹のウサギがいて、狐と猿とで仲良く暮らしていたんですって。するとある日、やせ衰えた老人が三匹の前にあらわれたの。そしてこう言ったというわ。

"わしはこのように衰えてしまい、食べ物も手に入らぬ始末じゃ。そなた達は哀れみ深いと聞いたが、どうかわしに食べ物を恵んではくれぬか？"

そこで木登り上手の猿はいろいろな木にのぼって、たくさんの果実を取ってきたの。狐は知恵があったから、人間が供えた餅や魚などを持ち帰ったわ。ところが、ウサギだけは、とっても臆病だったこともあって、食べ物を探してくることが全くできなかったの。でも、老人の役に立ちたいと思って、猿と狐に枯れ木をあつめて火を焚いてください、とお願いしたのよ。そして老人に、こう言ったの。私は食べ物を探してこれるほどの甲斐性が無いので、どうか私の体を焼いて食べてくださいと言って、火に飛び込んだというの」

私は驚愕した。オリジナルのサソリの火では、さそり自身の自己犠牲の物語が語られていた。それが見事に、日本では今昔物語で登場する、月のウサギの仏教説話にすり替わっているのである。どちらも自己犠牲の精神を貴ぶ話には変わりない。

「そして、それを見た老人は、にわかに凛々しい姿に変身したの。実はね、その老人は帝釈天様だったのよ。帝釈天様は、老人のために自ら犠牲になったウサギに感心して、そのウサギの姿を永遠に忘れないように、月の模様に残したんですって。そして、その時の火は、いまでもベテルギウスの炎になっているというの」

ううむ……ここで天文学者としては言わねばいけないのだろうか。悩んだ末に、割って入った。

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどウサギの形に並んでいるよ」

いっかくじゅう座の絵姿（フラムスティード星座絵図）。バラ星雲（右下）はこのいっかくじゅう座の中にある。バラ星雲は巨大なガスの塊で、その中で生まれた中央の散開星団（NGC 2244）の星々が放つ紫外線によってガスが電離して、赤いバラのように見えている。（撮影：山根 悟）

確かに、うさぎ座だった。小さな、そして暗い星からなる星座ではあるが、耳が二本ぴんと立った形はわかりやすい。

「どれ、どれ？」

子どもたちが光る三角標を結んで探し始めた。みな、本当にうさぎ座など見たこともないだろうなぁ、と思いながら、三角標の結び方を教える。なんだか自分の役割はこれなのか、と思い始めていた。

いっかくじゅう区

ベテルギウスの火が後方になるにつれ、天の川のまわりもさらに寂しくなっていった。オリオン座を離れれば、天の川はほとんど目立つ星のない、いっかくじゅう座に入るはずで、寂しくなるのは当然だった。オリジナルでは、ケンタウル祭の賑わいに入っていくはずだが、逆回りだとそうもいかない。

と、かすかに花が咲いているのに気づいた。と、丘に近づくにつれ、その数はみるみる増えていった。野原に咲くリンドウの色ではない。赤いバラだ。小さなバラが無数に咲いているのだ。そしてその丘の中心にはたくさんの光る三角標があった。

「わー、きれい！」

子どもたちが歓声を上げる。間違いない。この形は……バラ星雲だ。代表的な星形成領域で、肉眼では見えないはずだが。

「あれは何？」

その子が私に聞いてきた。

「あれはね、バラ星雲といってね。生まれたばかりの星たちと、その母親の雲だよ。雲の形がバラの花びらみたいに見えるからね」

バラ星雲にはメシエ番号はついていない。

「えーと、NGC 番号は何だったかな？　確か複数あるはずなんだが……」

とぶつぶつと呟いていると、急に思春期の男子らしい甲高い声がした。

「潤一くん、相変わらずだなぁ。NGC 2237、2238、2239、そして 2246 だよ」

え？　そう思って振り返ると、そこにはいつの間にか中学生の風貌をした聡明そうな男子が座っていた。そして、その顔を見て驚いた。丸刈り、広いおでこ、切れ長の目、その顔には見覚えがあった。

「いしかわくん？　石川靖くんかぃ？　まさか…」

そうだ、いま目の前に居るのは間違いなく中学の同級生で星仲間だった石川靖くんだ。

「なじょ、しただ（どうしたんだ）？」

驚きのあまり、会津弁になってしまった。そして、何を話してよいかわからず、その後は、言葉を継げなかった。彼は天文に関する知識は人一倍あって、その記録力も確かで、星の話をしているとしばしば私のいいかげんな知識の間違いを正してくれた。会津地方の山間部の僻地医療を支えるお医者さんの息子さんとして、将来を嘱望されていた。義務教育でも、山間部ではなく、地方の中核都市のマンモス中学校に入ってきたのだ。そして父の跡を継いで医師になる、と言っていた。しかし、中学３年の時だったろうか、帰省した山間部の自宅近くの道路を自転車で走行中にトラックにはねられて亡くなったのだ。あぁ、これか。これだったのか。私は混乱しながらも、石川くんがカンパネルラだったのか、と思った。

「いや、久しぶり。元気にしていんかよぅ？　だけっじょ、よい景色だよなぁ」

石川くんの瞳は私から離れ、窓の外、遠くを見つめた。何を見るでもなく、じっと。そう、あの頃と同じだ。遠い中学時代、よく星仲間でおしゃべりをしていた。おしゃべりしている最中、彼はふっと会話を離れ、遠くを見つめ始める癖があった。それは彼のシャイな性格からきているのか、と思っていた。しかし、彼の死後、どこかでもしかしたら彼自身がその運命を悟っていたのかもしれない、と思ったことがあった。目の前に居るのは、その当時の彼の姿、そのままだった。

私はこの目の前で起きていることに圧倒され、しばらく何も言うことができなかった。いったい私は何を経験しているのだろう。私の脳内の記憶が作る幻影なのだろうか。何も言えず、黙って二人で見つめる窓の外には、幻想的な風景が広がり、列車は私の気持ちとは無関係に、川を南下し続けていく。

（続く）

次は「おおいぬ区 ごいぬ区 アルゴの停車場」

銀河鉄道の夜空へ

ダイヤグラム Vol.05　時計屋の望遠鏡

「八戸ポータルミュージアム はっち」4階の前原寅吉コーナーに展示されている「黄いろに光って立ってゐ」る2台の屈折望遠鏡。

「八戸ポータルミュージアム はっち」3階に掲示されている前原寅吉の紹介パネル。

宮澤賢治が著した「銀河鉄道の夜」には、主人公のジョバンニが住む街の様子が描かれています。そこは賢治の故郷である花巻が舞台となっているようです。街を流れる川や橋、小学校、印刷所、時計店、電気会社などなど……登場する場所や施設は、当時、賢治が暮らしていた花巻の街中に実在し、そのモデルとなったと考えられるものも少なくありません。

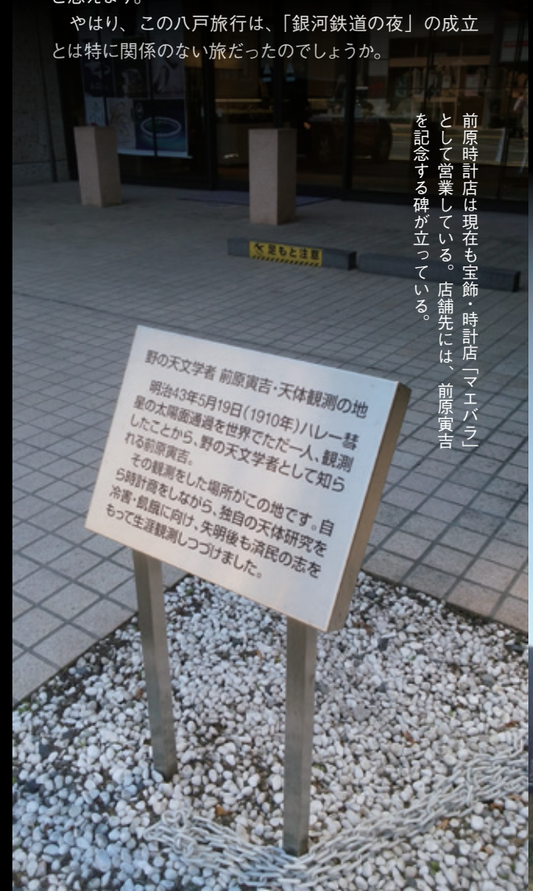
中でも、ジョバンニの銀河鉄道への乗車を予兆させるシーンが「時計屋」の描写に見られます。店には青いアスパラガスの葉で飾られた黒い星座早見が置かれ、『ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。』／『またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立ってゐましたしいちばんうしろの壁には空ぢうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかってゐました。』この時計屋も花巻の街中にあった時計店と考えるのが自然ですが、花巻から北へ離れること約130 kmの青森県・八戸市にあった時計店が実はそのモデルではないのかとの説（歴史学者・色川大吉氏）もあります。

その時計店の主の名は前原寅吉（まえはら　とらきち／1872　1950）。前原寅吉は、時計商を営みながら、天文愛好家として知られ、独学で天文学を修めて太陽やハレー彗星の観測などで記録を残し、太陽観測用に開発した「黒色ガラス」が認められて日本天文学会の特別会員に推薦されています。また、「天文山」と称して、天文教育活動にも取り組み、様々な天体写真や解説を盛り込んだ学校教材を制作して広く全国の学校に配布するなど天文普及家としても活躍しました。特に太陽の観測に力を入れたのは、気候と太陽活動との関係を解明することで、冷害をもたらす「やませ」発生の予報に役立てて、地域の農業を守りたいとの思いからでした。天文への情熱や東北地方特有の天候不順に対処するための科学的知見の活用など、その関心や思いは宮澤賢治と軌を一にするところがあります。実際、前原寅吉は真鍮製の「黄いろに光」る望遠鏡を所持していて、近所の人たちを集めて観望会を開いていたようで、現在もその実物が「八戸ポータルミュージアム はっち」に保存されています（写真）。

当時、そんな地域でも評判の名物時計店のショーウィンドウに、星座早見や望遠鏡が飾られていたとしても不思議ではないでしょう。そして、天文普及家として活躍していた前原寅吉の名が、花巻農学校の教諭であった宮澤賢治の耳に届いていても不自然ではないので、それを聞きつけて前原時計店を訪れた宮澤賢治が「銀河鉄道の夜」にその店の様子を紹介していたとすれば……。

しかし、残念ながら宮澤賢治が八戸の前原時計店に立ち寄ったという記録は見つかっていません。ただ、1926年8月に妹のシゲとクニ、甥っこの純蔵の3人を連れて、八戸へ2泊3日の小旅行をしたとの記録が残っています。これによると、八戸の鮫地区（鮫駅下車）を訪れた宮澤賢治一行は、駅近くの海岸沿いの旅館に投宿し、2日目は種差（たねさし）海岸、3日目は蕪島（かぶしま）を観光し、早めに花巻に帰ったとあります。種差海岸や蕪島は今でも八戸観光の定番スポットです。なぜこの時期に賢治が八戸を旅行したのかは不明ですが、鉄道好き（乗りテツ？）の宮澤賢治（2022年春号・p27のダイヤグラム Vol.03を参照）が、1925年11月に尻内駅（現在のJR八戸駅）から三陸のリアス海岸沿いに陸中八木駅まで延伸された八戸線に乗車してみたかったからと考えるのは飛躍のし過ぎでしょうか。ただ、前原時計店があった八戸中心街（旧・八戸駅が最寄りの乗降駅）と鮫駅では間に八戸線の駅をいくつかはさんで6 kmほども離れており、記録に残る旅程からすると（旧・八戸駅で途中下車したとの記録はない）、常識的には来訪は困難と思えます。

やはり、この八戸旅行は、「銀河鉄道の夜」の成立とは特に関係のない旅だったのでしょうか。



前原時計店は現在も宝飾・時計店「マエバラ」として営業している。店舗先には、前原寅吉を記念する碑が立っている。

銀河鉄道の夜空へ

ダイヤグラム Vol.06　鳥を捕る人

『今日は舟を頼んでウミネコの繁殖地蕪島を見にゆくのである。屈強の男がふたり舟をこいで島へのりつけて上る。一面雑草の中に数知れぬウミネコがおり、春やってきて産卵し生まれたヒナたちを加えて何千羽かわからない。男たちが雑草を根こそぎぬいて放りなげると、休んでいた鳥たちは一斉に舞い上りミュウミュウと空をまっ暗に覆ってとびまわった。』

八戸ツアーの最終日、宮澤賢治一行が訪れたのが蕪島です。上記はその時の妹たちの回想記録です。蕪島は鮫地区にあって、宮澤家一行が宿泊した旅館から目と鼻の先に浮かぶ小さな島（後の工事により現在は陸続き）でした。ウミネコの大繁殖地として知られ、島の頂上に蕪島神社（社伝によれば創建は1269年）があり、ウミネコは好漁場を知らせる弁天様の使いとして昔から大事にされてきたことから、人が近寄っても恐れないので、間近で多くのウミネコの営巣の様子を見物することができる名所です。1922年に天然記念物に指定され、宮澤家一行が訪れたのはその4年後のこと。特に8月は、巣立った雛たちも加えて渡りを行う直前のタイミングで、島中が1年でいちばん賑やかな時期です。その数は現在では4万羽ともいわれ、文字通りウミネコが島を埋め尽くします。先の記録にある『休んでいた鳥たちは一斉に舞い上りミュウミュウと空をまっ暗に覆ってとびまわった。』光景は、さぞかし宮澤賢治を驚かせたことでしょう。

さて、その気になればすぐにでも捕まえられそうな数えきれないたくさんの鳥たちのイメージ。それは、どこかで…たとえば、以下の文章のイメージと重ならないでしょうか。『がらんとした桔梗いろの空から、さっき見たような鷲が、まるで雪の降るやうに、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱいに舞ひおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだといふやうにほくほくして、両足をかっきり六十度に開いて立って、鷲のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押へて、布の袋の中に入れるのでした。』／『と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふって叫んでゐたのです。「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはっきり聞こえました。それといっしょにまた幾万という鳥の群れがそらをまっすぐにかけたのです。』

「銀河鉄道の夜」で繰り返し語られるたくさんの鳥たちとの不思議な邂逅。その原点がこの蕪島での体験にあったとすれば、八戸の小旅行は、幻想四次の軌道を疾走する銀河列車のダイヤグラムに大きな影響を与えたといえるかもしれません。そして、記録には残っていないものの「黄いろに光」る望遠鏡との出会いもこの時、実現していたのかもしれません。八戸線もまた、銀河鉄道へとつながっていたのです（★／2022年春号・p27のダイヤグラム Vol.02を参照）。

人を恐れない蕪島神社の参道に群集するウミネコ。

「がらんとした桔梗いろの空」に群舞するウミネコ（左）。空ががらんとしているのは、銀河鉄道が敷設された星の密集する銀河面（天の川）に対して垂直方向（銀河北極方向）に空漠と広がる深宇宙領域を見ているからかもしれない。そこには、億光年のかなたに群集する系外銀河の姿が…（当時は天体写真は乾板によって撮影され、それは白黒反転像となる。右は旧国立天文台岡山天体物理観測所が撮影したしし座方向の銀河団の乾板。黒い●は銀河系内の恒星像。それ以外の淡いイメージはすべて系外銀河）。なぜかウミネコたちの姿と重なる。

ウミネコが乱舞する蕪島。

★「時計屋」や「鳥を捕る人」の記述は、1924年末に成立したと推定される第1次稿、その後の第2次稿には存在せず、1926年中に整ったと考えられる第3次稿に登場する。